

『まことにして一つなる教会』をめざす

日本キリスト教団
福音主義

教会連合

2007

7

第361号

説教

「あなたは世に欠かせない」

マタイによる福音書5章13節

千葉・柏教会牧師 春原 禎光



「あなたがたは地の塩である。ここで「地」と表現されているこの世は、やがて今とはまったく変えられて、完成されます。また、塩はわたしたちの体にとって不可欠なものです。主イエスは、完成へと向かっているこの世にとって「あなたがた」が不可欠な存在だと語られます。「あなたがた」がいなければこの世は完成へと向かうことができないのです。神は「あなたがた」をなくてはならない存在としてくださっています。わたしたちにとって、神から不可欠な存在とされることほど大きな幸いはありません。「地の塩」とはこの幸いに生きる者たちのことです。この幸いをわたしたちはどうして拒むことがありますでしょうか。

◆ 世の完成のとき、罪や悪は消え去ります。その時が来るまでは、罪や悪はこの世に存在し続けます。罪や悪が完全に取り除かれるのは、神が世を完成させることによつてのみであるということをおぼわす。私たちは知らなければなりません。このことをわきまえて神による世の完成を願つていくのが、「地の塩」としてのわたしたちの務めです。

◆ ところで、塩分の取りすぎは体を壊しますが、この世には「地の塩」がどんなに多くても不都合はありません。むしろ、「地の塩」である者を増やす務めがわたしたちに与えられています。しかし、たとえごく僅かでも「地の塩」である者が存在しているならば、それによつてこの世は完成へと歩みを進められています。

◆ わたしたちは神によつて「地の塩」とされています。神から離れていたら、わたしたちは塩気を失い、神の目に役にも立たなくなつて、投げ捨てられてしまいます。◆ そもそも、罪にまみれたこの世に存在しているわたしたちが、いったいどうして塩とされるのでしょうか。本来わたしたちは、何の役にも立たないものとして投げ捨てられて当然の存在です。

◆ しかし実に、主イエスご自身が投げ捨てられる者となられました。主イエスが「あなたがたは地の塩である」と語られるとき、そこには「わたしがあなたがたの代わり」としてのわたしたちの生き方としてのわたしたちの生き方です。

◆ 主イエスの身代わりを身に受けて「地の塩」とされるのは洗礼です。そして塩気を保ち続けるのは聖餐です。わたしたちは、洗礼と聖餐によつて、この世に不可欠な存在とされ続けます。

◆ 洗礼と聖餐が行われるところが礼拝であり、礼拝において「地の塩」とされている人々が完成の時に実現される世を見せていただくところが教会です。礼拝する教会において、わたしたちは主イエスの身代わりになります。この幸いをわたしたちはどうして拒むことがありませんか。

『関の声』を聞く

沖繩・読谷教会牧師

具志堅 篤

第35回教団総会には推薦正議員として出席させていた。そこで1966年から40年間の教団の歩みの中で犯した罪に対する十二の懺悔項目を目にした。それらは結局第二の項目の「聖書の正典性に揺らぎをきたした事」この一点に集約される。「神の言葉」としての聖書に対する信頼を失った教会の彷徨う姿が荒れ野の四十年ではなかったらどうか。

教団の「荒れ野」時代が始まる1966年はベトナム戦争の激化、米国の戦略爆撃機B52による北爆が本格的に開始された年でもある。米国国内でも短期終了を期待した戦いであったが泥沼化し米国側も多数の犠牲者を出し反戦運動が活発になった。メディアはベトナム、教会もベトナム、人々は教会に神の言葉に

よる慰めを求め、平和創造の力を得ようとした。しかし、講壇から語られるのは御言葉ではなくベトナム。平和創造のために御言葉による慰めと励まし、が求められていた。しかし、説教者は御言葉を語ることもヒューマニズムを語った。そして、教会に失望した人々は教会(メインライン)から去って行った。そういうことを以前にある方から伺ったことがある。

教団もその影響を受けてはいないだろうか。もはや聖書は正典ではなくなった。それに代わってアナキーなヒューマニズムが聖書に代わる正典となっていく。そして、1967年、全共闘運動が始まる。漫画「天才バカボン」の雑誌掲載が始まったのも1967年である。「さんせいのはた〜い!」が流行った。

バカボン親子の信条は、徹底的、根源的に秩序ある行動はとらないというものであった。バカボン親子は原理主義者なのだ。全共闘が主張したのは「無秩序」というよりも「反秩序」であったように思える。教団の会議で「反秩序」が主張され、その末端で造反者たちは「無秩序」の心地よさを味わっていたのが教団の「荒れ野の40年」ではなかったらどうか。

70年代に流行したフォークソングにかくや姫の「神田川」がある。その一節に「…ただあなたのやさしさが怖かった」とある。何故か造反側の者には優しい人が多いという印象を持つ。しかし、「反秩序」「無秩序」からくる優しさは教会をどこまでも誤った方向へ導いてしまう。「ありのまま」という優し

さは真の自由のもとで受容されるならよいかも知れない。規律のない自由はない。造反教会にはルールはあってもルールはない。聖書の正典性、使徒的伝統を受け入れる教会には当然そこにはルールがあり、秩序がある。故にそこに

は真の自由もある。もし、それがなければそれはルールズであって反秩序である。そして、その行き先は教会解体へと向かう。「放蕩息子」のような教会は湯水の如く捧げものを食いつぶす。これは「道しるべ」となるべく神の言葉を見失った結果である。

教団は、執行部の努力により正常化が進んでいるように見えるが、事態はより深刻な一面を見せ始めているとの声を耳にする。むしろ筆者は、40年間の教団政治の中で暴力という厚い皮が剥けたところ

にその本性が現れたと見る。造反者たちの暴力を許してきたのは神の言葉の否定であり、聖書の正典性のゆらぎである。教団は、揺るぎなき神の言葉(正典)にしっかり立たなければならぬ。そして、その証しとして私たちはいよ

いよ日本基督教団信仰告白に堅く立つ教会を形成していくことを決意新たにしなければならぬ。

そして、3項目から12項目に掲げられた課題をクリヤーしていくために心を合わせて働かなければならない。具体的には既に本誌2月号で倉松功先生が述べられたことを「力と愛と思慮分別の霊」によつて成し遂げよう。

もし改革が進めば、聖書の正典性のゆらぎのために、信仰告白が曖昧になりそれが相対化されたために教団を離脱した我々の仲間たちが戻ってくるのではないかと期待がある。山北議長総括にそのようなヴィジョンを見るのは筆者だけだろうか。

今日まで、教団を投げ出さずに命をかけて守って来られた先輩たちに深い敬意を表せずにはおられない。それ故にその働きを決して無駄にはならない。筆者が山北議長総括から聞いたのは正に「関の声」であった。「御言葉を宣べ伝えなさい。折りがよくても悪くても励みなさい。」(Ⅱテモテ4・2)

▼実録 教団紛争史(一)

第一章 教団紛争の輪郭

日本基督教団常議員
福音主義教会連合常任委員

小林 貞夫

1. 執筆の動機

標題の記録を書き残さなければいけない、と、強く意識し始めた動機は以下の四つである。

(1) 日本基督教団の歴史は66年になる。その半分以上にあたる38年は、いわゆる教団紛争の歴史である。教団に属するすべての教会・信徒は、このことを避けては通れない。

教団とは何か、紛争の内容は何かについては、本文で明らかにすることになるが、教団紛争は教団にとって、最大の出来事だったのである。

(2) この教団紛争について、知らない世代・人が増えてきた。時日の経過で止むを得ない面もある。

しかし、意図的に忘れようとしたり、係わりを隠そうと

する人もいる。発言したことや行動したことを無かった事のように振舞う傾向も目立ってきている。これを許していたら教団形成は出来ない。

(3) 教団紛争の通史は目下のところ見当らない。部分史もないと言ってもよいだろう。志している人はいるかも知れない。が、それは先の話である。とすれば、教団正常化を目指した同志的集団である福音主義教会連合に属する者に責任がある。

不十分を承知しつつ先鞭を切る由縁である。後に続くことを願いつつ。

(4) 日本基督教団年鑑には「教団の記録」というまとめが載せてある。これを読めば教団の概略が分るといって、まあで書かれている。が、それは無理である。紛争を意図的に隠すからである。

時の教団のあり方を正当化するのには、組織としての当然があり、問題提起者が圧倒的だった20年間ほどについては止むを得ない面もある。

牧会手帳なども同列である。これらが、そのままであるのは良くない。正すべきは正さねばならない。

2. 執筆にあたって

(1) 標題に実録とつけた。目で見たこと、耳で聴いたこと、体験したことを中心に展開したいという強い思いの末である。従って分り易くなければいけないという点にもこだわりたい。

そうでなければ、あえて先鞭をつける意味はうすい。という思いが、この実録という異例の中に含まれている。

(2) 38年の紛争中、筆者が

教団常議員として係わったのは19年間である。もちろん教区や分区、教会を通して、それ以前にも多少の係わりはあった。が、実録の主旨にも照らせば、紛争後半部にウエイトがかかるのは当然である。

紛争前半期については、キリスト教年鑑を始め、比較的正確な記録が残されていることをつけ加えておきたい。

(3) 紛争の基底は暴力である。暴力は体験した人と、話として聞いた人とは、全く別のものになる。そこを、少しでも埋めておかないと、後の人が見誤ってしまうことになる。

個人個人の発言も、暴力の威圧によって少しずつずれる。集団や会議の方向も妥協という変質をする。この部分を何としても書き残さねばならないのだが、これはすでに文学表現の領域になる。

それでも、筆者は本気で、この部分に立ち向いたいと願っている。

(4) 紛争に係った人たちの呼び方を統一しておきたい。

A 問題提起者 紛争の主役である人びとを、こう呼ぶことにする。造反派という呼び方もある。もともと毛沢東の造反有理から発して、暴力革命も辞さず、という運動が教団にも及んだのであるから、造反派のほうの実体を示しているという見解もある。

ただ教団内の記録などで最も多く用いられているので、今回は統一して用いたい。

B 教会派 福音主義教会連合に結集した人や、小島誠志・山北宣久教団議長を強く推進した人びとをこう呼びたい。伝道派と呼ばれることもある。最近では教憲・教規派と呼ばれることが多い。

初心の方に一言つけ加えれば、問題提起者たちと鋭く対立し、その誤りと強く闘ったのは教会派だったのである。

C 中間派 A B何れにも属さなかった人をこう呼びたい。この中には、地方の教会で教会形成に励んでいて、ほとんど何も知らないで経過した人と教会が入る。

中間派の中には、紛争の内容については理解した上で、中間点に立つように振舞った人びともいた。こういう人の多くは、採決に当たっては問題提起者に同調せざる得ないこ

とになった。結果的には、紛争を長びかせる原因となった。次項でも触れ、具体的展開の中でも、たびたびとり上げることになる。

3. 教団紛争とは

教団紛争とは何であったのかは、本稿の終了を待たなければならぬ。しかし逆に、輪郭を示さなければ展開を示すことも難しい。

そこで、教団、紛争、暴力について一応の前提を示しておきたい。

A 教団

ここで示す教団とは教団本部のことである。日本基督教団総会議長、副議長、書記の三役。教団事務局とその責任者である総幹事。出版局、年金局などの組織。教団総会、常議員会、各委員会などのことを指している。

それらの機関が、会議を行ったり、業務を果したりすることすべてを含んで教団と呼ぶことにする。

B 教団と教区の関係

紛争に関しては、教団と教区は相似的であり、教団で起ることは、似たような形で教

区でも起っていた。その逆もあつた。

ただ、紛争の後期になると教区としては主張がまとまる傾向を見せた。その結果として、教区全体が問題提起者の主張にそう方向を指した所が現れた。北海、奥羽、京都、兵庫、東中国、西中国、九州教区が相当する。

当然、教会派の主張を行う教区もある。東京、西東京、東海、中部、四国教区が相当する。

4. 暴力Ⅱ紛争の核心

先にも示したように教団紛争の核心は暴力である。暴力によって教団運営がゆがめられたのである。教団紛争を暴力展開の歴史であると言い換えることが出来る。

暴力は物理的暴力と精神的暴力となつて現われた。

物理的暴力の第一は、ヘルメット、竹竿などで議場を混乱させる。時には議場で殴るに及ぶものである。

第二は議場妨害である。議長団席をとり囲んで進行させない。マイクの操作で正規の発言は一切聞えないようにす

るなどである。
第三には威嚇である。発言者の隣に立つて悪口を言い続けたら、問題提起者の意にそわぬ発言に向けての一斉のやじなどである。
精神的暴力とは、精神的圧力や脅迫をかけられた人が、ひるんで見解を曲げることである。さらに脅迫者の気に入

るような発言を言ったり、行動することになってしまふ場合もあつた。

イエスはキリストではないという問題提起者に向つて、それも分るが、という発言をする。信仰義認は誤りだと主張されても異を唱えない。そういう中間派の人は、長く責

任を問わなければならない。

5. 紛争経過表

年代	教団議長	どういう様子だったか	例えば	暴力の様子
66～69	鈴木正久	良い志が	戦責告白も万博参加も	ひどい暴力はなかった。
69～71	飯 清	悪が芽生えたとき	出し方を間違えた	暴力によるつるし上げが多発した。血を流したことも。
71～73	吉田満穂	大混乱に終始	破つてきた	正しい提案は糾弾され、撤回させられた。
73～78	島村亀鶴 戸田伊助	悪を指摘し	聖書正典、信仰義認、	暴力を礼讃した。
78～88	後宮俊夫	暴力を肯定	信仰告白を否定した	それが会議の多教訓となった。
88～92	辻 宣道	悪が定着したとき	問題提起者が	正しい発言には、必ず暴力の妨害があつた。
92～96	原 忠和	悪に利用された	議長一人だけが	暴力的脅迫で議事が決り、問題提起者の思い通り、
96～02	小島誠志	大地震で悪が増中	伝道を進めたい	ナイフ事件が起り、
02～	山北宣久	悪をしりぞけた	伝道推進の決議も	教団の信頼は地に落ちた。
		良い志を目指す	いくつか出来た	暴力があつても
			教憲・教規が教団の大前提と主張	暴力がなくなつた
				暴力を排除したい、と志ざしている。

東京神学大学名誉教授

佐藤敏夫先生を天に送って

福音主義教会連合神学研究委員長
東京神学大学教授

近藤 勝彦

東京神学大学名誉教授佐藤敏夫先生は、10年に及ぶ療養生活を経て、去る6月5日、ご家族の見守られる中、主のみもとに召されました。動脈閉塞が進行し、肺炎を併発されてのご逝去で、84歳でした。かねてから葬儀は東京神学大学のチャペルで行なうことと式辞は近藤に依頼するということご意志が家族に伝えられていましたので、葬儀は6月9日(土)の午後2時より、東京神学大学のチャペルにおいて200名ほどの参列者によって行なわれました。司式は中村町教会の後継牧師である東京神学大学准教授小友聡牧師が行ない、式辞は近藤、弔辞は中村町教会代表白鳥正孝氏、友人代表倉松功先生、東京神学大学学長山内眞先生でした。葬儀の式辞の聖書箇所

所はフィリピの信徒への手紙3章12から16節、故人愛唱の讚美歌として歌われたのは316番「主にありてぞ、われは生くる」でした。以下は、当日述べた式辞の骨子ですが、日本基督教団の改革や日本における福音伝道について志を同じくしていた佐藤先生に対する感謝の思いを、教会連合機関紙の読者の方々にも共有していただくことは意味のあることと思ひ、ここに掲載させていただきます。次第です。

佐藤敏夫先生は1923年1月1日、山形県鶴岡市にお生まれになりました。大学は、はじめ慶応義塾大学経済学部に入學され、慶応YMCAに参加し、そのときから神学に対する関心と理解を深めるようになりました。熊野義孝

の『弁証法的神学概論』をはじめ種々の神学書を読まれたと言われます。しかし学徒出陣に遭遇し、フィリピの戦場に2年間を過ごし、終戦の翌年復員しました。先生が激動する歴史に直面し、歴史の不幸を身をもって経験したのは、このときと、その後1970年前後の「全共闘」による学園紛争、教団紛争によつてではなかったかと思われまふ。戦後、一時慶応の哲学科に戻られたが、中退し、昭和22年日本基督教神学専門学校(現在の東京神学大学)に入學されました。神学における信仰と歴史「ヘルマン」もので、「信仰と歴史」というテーマは佐藤先生の生涯のテーマになりました。信濃町教会での牧師としての奉仕を

経て、アメリカに留学され、ニューヨーク・ユニオン神学大学でS.M.(神学修士)の学位、ハートフォード神学大学でPh.D.の学位を取得されました。博士論文の題は「シユライエルマツハー、ヘルマン、ブルトマンの神学的方法における宗教的経験」というものです。1959年、帰国と共に東京神学大学で教鞭をとるようになりました。1960年代になりますと、他にも海外留学や学位取得を経て東京神学大学に戻つて教鞭を取るようになった「若手の教授たち」が加わり、一群の神学者たちが形成されました。今か今かと思えば、あの一群の神学者たちによつて東京神学大学は、諸教会の尊敬と信頼を得て、教団紛争の激動を乗り切ることができたわけです。佐藤先生はその若手の先生方の最年長の先生でした。葬儀の式辞ですから、逐一詳細に語ることはできません。ただ佐藤先生のお働きの教会史的、神学史的な意味について要点を絞つて述べて、先生に対する感謝の意を表したいと思ひます。それはまたあわせて先生を支え続けてこられた恵子夫人に対する感謝でもあります。その上で佐藤先生を日本の教会に遣わし豊かに用いてくださった神様の聖名をほめたえたいと思ひます。

第一に言わなければならぬことは、すでに言及しました1969年の教団紛争、そして東京神学大学がその紛争に巻き込まれたときに、佐藤先生が当時の「若手の教授たち」とともに、その中の年長者として紛争の渦中に身を置き、それに耐えて東京神学大学を守り貫いた点です。佐藤先生は高崎毅先生の後を受けて紛争激烈な中、学長の任を負いました。諸教会の理解を得るために「東神大紛争記録」を記したのは佐藤先生でした。特に日本基督教団第18回総会において造反勢力の「十字砲火」の中、答弁に立ち、「非難決議」を突きつけられ、苦渋を味わいつつ、東京神学大学の基本線を買きました。先生は若

いときからマックス・ヴェーバーやエルンスト・トレルチを通して社会科学の造詣が深く、そうした社会科学による知見も踏まえて、思想的に混乱した紛争の時代に神学的、思想的な指導力を発揮されました。学長職を退かれた後も、雑誌『福音と現代』を自ら発行して、緊急な神学的諸問題について発言し、神学的オピニオン・リーダーの役割を果たされました。東京神学大学が今日、福音主義の神学をもって世に立ち、伝道者の育成に努め続けていることは、多くの先達の労苦があつてのことですが、その中に東京神学大学元学長佐藤敏夫の戦いがあつたことを私たちは忘れてはならないと思います。

第二の点は、佐藤先生が神学教師として、神学生を育成し、さらに牧師たちの神学的修練を導いた点です。先生の神学教師としての働きは、東京神学大学を中心に行いましたが、先生はさらに非常勤講師の形で教団の他の認可神学校においても教義学を教授しました。また日本基督教

学会の維持発展にも尽くされました。教団内外の多くの牧師たち、また教務教師たちが先生によつて直接、あるいはその著作を介して、健全にして斬新な神学を教えられました。先生の著作の姿勢は簡潔にして要を得た叙述の姿勢です。いかに難解な事柄であっても、その本質を鋭く把握して簡潔にまとめるところに先生の力量がよく発揮されました。先生の著作には、何を書いているか著者自身も熟知していないと思われるような箇所は一つもありません。先生はそのすぐれた理解力と伝達力をもつて、実に多くの著作を生み出しました。その分野は教義学を中心にして、倫理学、文化の神学、キリスト教思想史、さらには日本のキリスト教史・神学史などに及んでいます。晩年の代表作『キリスト教神学概論』は「牧師・伝道者の神学」の有益な著作として今後も残り続けるでしょう。先生はまた「福音主義」を日本の教会の起点として重視し、植村正久、そして奥様の父上である高倉徳太

郎の「福音主義」について記述しています。先生ご自身の神学も「福音主義」の系譜に立つものでした。それは、いわゆるルター派の福音主義よりも、あるいは特定教派的な神学よりも広く、敬虔主義をも取り込んだ自由教會的で伝道的な福音主義です。ホーリネスの信仰をもつておられたお母様から受けたものもその中に結実していると思われま

す。先生はこの福音主義を教義学的に深め、また広げようとしてされたわけです。佐藤先生のこの福音主義の神学姿勢は、今後とも日本の教会にとつて重要な意味を持つと思われま

第三は、少し専門的な点で、佐藤先生が立たれた神学的な位置についてです。先生の学問的関心の主題が「信仰と歴史」であることはすでに申しました。それは先生の名著『近代の神学』にも現われています。このテーマを佐藤先生は「トレルチとバルト」という仕方でも表現されました。先生が 75 歳の時、私たち幾人かの者は、先生に対する感謝の献呈論文集として『福音の神学と文化の神学』を出版いたしました。その本の中に先生ご自身、「わたしの神学五十年」という文章を寄せてくださいました。その結びに佐藤先生は、熊野先生の言葉を紹介しながら、ご自分について語られています。熊野先生の言葉というのは、「体質的に自分とちがう人をいくら批判しても伸びない。自分と似ている人の批判をしなければだめだ」という言葉です。そして佐藤先生は、「わたしも体質的にはトレルチと似ていて、これと組み打ちしながら学問にはげんだ」、そしてその批判として立脚したのはカール・バルトの「原歴史の概念」だと語っています。バルトの「原歴史」というのは、相対的な歴史を越えた神ご自身の中にある決意を意味しています。それは、人間に向けた神の向きと言つてもよいものです。佐藤先生がそこに立場を取るといふことは、先生の著作で言いますと、『永遠帰郷の神話と終末論』という著作の中に先生の「信仰と

伝道する教会と礼拝堂

第2回

東京神学大学教授
五反田・玉川平安教会牧師

山口 隆康

光と「空虚な空間」

五反田教会戸越礼拝堂の設計理念の中心テーマは「礼拝堂と光」です。朝の光が上から聖餐の食卓に射してくるよう

に設計されています。計画の出発点で礼拝堂に何が不可欠であるかを丁寧に考えざるを得ませんでした。そこから「聖なる空虚(sacred emptiness)な空間」の実現が目標になりました。この「空虚な空間」の中で礼拝者は神と人間の無限の隔たりの中に身をおきます。礼拝堂の中から一切の人間的なものは取り除かれるとき、そこは喪失感が支配するわびしい空間になるのでしょうか。それとも聖霊なる神だけが満たすことのできる「聖なる空虚」が実現するのでしょうか。五反田教会は、礼拝堂を多目的に

使用することを最初から拒否しました。そのような実用性を犠牲にすることにより「空虚な空間」を祈りの空間として実現したいと願いました。かつてのローマ・カトリック教会のみならず、現在のプロテスタント教会の礼拝堂にも無造作に絵画・聖句・標語等が掲げられています。礼拝堂になければならないものが行方不明になり、本来なくてもよいものが雑然と置かれていく光景は避けたいと願ったのです。礼拝堂は祈るための空間です。そうであれば祈りを妨げる一切のものを取り去ることこそ、祈りの手を神に向かつて差し出す助けになると考えたのです。

このような設計理念に基づいて一切の装飾品や生活感のある道具類は置かないことにしました。礼拝堂の中に礼拝に不必要なものは配置しないという課題は、礼拝者の姿勢に深く関わることになりました。礼拝堂の中に不必要なものがある道具類は置かないことにより、礼拝者の姿勢に深く関わることになりました。

このように設計理念に基づいて一切の装飾品や生活感のある道具類は置かないことにしました。礼拝堂の中に礼拝に不必要なものは配置しないという課題は、礼拝者の姿勢に深く関わることになりました。

戸越礼拝堂は「聖なる空虚な空間」をただ光によって実現することを目指しました。上方から射してくる光の中に

聖餐台が浮かび上がる礼拝堂になっていきます。礼拝者が空の手を神に差す「祈りの前の沈黙」こそ礼拝堂の中になくしてはならないものだ。この礼拝堂は語りかけます。

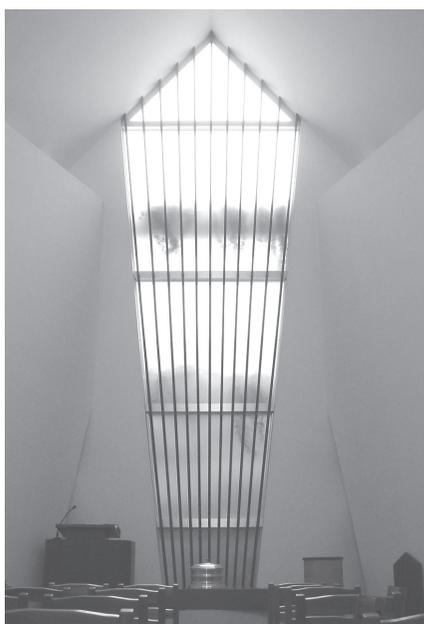
限られた狭い敷地の上に最大の床面積を確保する願望と礼拝堂の入り口に「ナルテックス」を設けることは矛盾します。それを承知の上で小さな小部屋をナルテックスとして設けました。礼拝者は、暗い小さな小部屋を通過して、光あふれる礼拝堂に入りま

す。その小部屋には、ほの暗さの中に「上方へ伸びる一筋の光」のみがあります。このナルテックス礼拝者が聖餐の食卓の前に出て行くために何を準備し、どこを通過する必要があるかを明確にする目的で設けられています。スペースの限界から、建築物として成功したかどうかはわかりません。しかし、礼拝堂のエン

ケーションを含めて教会を総点検するという課題の重要さを自覚させられます。(「聖なる空虚」についてはパウリティリッヒ『芸術と建築について』前川道郎訳参照)

光と「ナルテックス」(補足)

しかし、礼拝堂のエンランスは、バリアフリーにする必要があるでしょう。しかし、エンランスと礼拝堂の間に「罪の悔い改め」なしに通過することのできぬナルテックスの存在意義は聖餐礼典の意義が曖昧にされています。状況では省略できぬように思います。(左の写真は礼拝堂正面)



《シリーズ》信徒のための旧約用語基礎知識第14回

平和

東京・中村町教会牧師
東京神学大学准教授

小友 聡

と関係し、その治世が理想化されるのは象徴的です。旧約において最も一般的な挨拶の言葉はこの「シャローム」です。「平安あれ」と訳されますが、この言葉がもともと日常の挨拶用語だということとは実に示唆的ではありませんか。

3. 平和をもたらす神

旧約のシャロームにおいて特徴的なことは、それをもたらすのは誰かということですから。もちろん、王や政治家は平和を実現しようとはします。けれども、安易に平和の実現を語る者たちに対して、預言者は大変厳しい態度を取りました(エレ6章14節)。

旧約では、シャロームをもたらすのは人間ではなく、神です。神がシャロームをもたらす以上、人はそれを信じて待つほかはありません。それにもかかわらず、いつか地上に戦いが止み、まったき平和が訪れる日がやってくる。それを神が必ず実現して下さるといふ終末論的希望が預言者にありました。

「主は国々の争いを裁き、多くの民を戒められる。彼らは剣を打ち直して鋤とし、槍を打ち直して鎌とする。国は国に向かつて剣を上げず、もはや戦うことを学ばない(イザ2章4節)。

これは有名なイザヤの預言です。国連本部の前にこの言葉が刻まれたモニュメントがあるのはよく知られています。悲惨な戦いの結末をつぶさに見続けてきたイスラエルにこのような究極の平和の理想が存在したことは実に驚きです。

このシャロームをもたらす神がメシアとして地上に到来する。このメシア信仰がわたしたちにとっては決定的に重要です。

「ひとりのみどりごがわたしたちのために生まれました。ひとりの男の子がわたしたちに与えられた。権威が彼の肩にある。その名は、『驚くべき指導者、力ある神、永遠の父、平和の君』と唱えられる。ダビデの王座とその王国に権威は増し、平和は絶えることがない(イザ9章5〜6節)。

この平和をもたらすお方は、自らを犠牲にしてそれを完成するので。シャロームがもともと「補償する」という意味だということを最初に書きました。真の平和はまさしく「彼の受けた傷によって」(イザ53章5節) わたしたちに与えられるのです。それはキリストを指しています。

今回は「平和」という用語を取り上げます。「平和」と訳されるヘブライ語はシャローム。ヘブライ語は日本語とはまったく異なる言語ですが、「シャローム」は意外によく知られているように思われます。これは旧約聖書全体で237回の用例があり、極めて重要な用語です。

けれども、通常、わたしたちが「平和」という日本語の語感から受け取る内容とは異なった意味がシャロームにはあります。それについて説明しておきましょう。

1. シャローム

平和というと、まず戦争のない穏やかな状態を連想します。シャロームもそういう意味を有しますが、もっと本質的なものを含んでいます。

シャロームのもとになっている動詞は、「満ちる」「補償する」「完成する」という意味です。そこで、シャロームは、欠如した状態があるべき望ましい状態に回復するという事柄を指します。

ということ、旧約で「平和」という言葉が出てくるときは、いつでも平和が破壊され、秩序が失われた状態が前提になっているということです。実際、イスラエルの歴史は大国の興亡のはざまに常に翻弄され、戦いが止むことはありませんでした。それだけに、「平和」は悲願だったのです。

シャロームという言葉の背景にはそういう極めて不安定なイスラエルの歴史があるのです。イスラエルに最大の繁栄をもたらしたソロモンの名前が「平和」(シャローム)という内面的な意味をも含んでいます。

たとえば、「主が御顔をあなたに向け、あなたに平安を賜るように」(民数6章26節)。この「平安」がシャロームです。シャロームが人間の内面に実現するとき、平安がやって来ます。けれども、シャロームに含まれる内面的な意味を「平和」から切り離すことはできません。旧約では、外なる平和と内なる平和とは常に分かちがたく結びついているのです。もし、旧約の「平和」を心の安らぎという内面世界の事柄としてのみ理解するならば、シャロームの意味を著しく狭めて

★6ページの続き

「天上こそわれわれの祖国であって、現世は暫時(ごんじ)の生」であると。「人間の究極の救い」は歴史の彼方である神の御許にあるというのです。この思想によって先生は苦勞の多い歴史から単純に「脱出する」ことを勧めていと理解するべきではありません。「現世の生涯をいい加減なものにするのではない」とおっしゃっています。「むしろ祖国に帰るまでのしばしの生であり、終末の希望を約束された現世の生であればこそ、人は積極的にこれと取り組む力を与えられる」。「われわれははかり知れない神の思いと意志から、この世に生きるべく命じられているのである」、生きるべき課題を与えられているのである」と言うのです。そしてさらに言葉を繋いで、「われわれは小さいながら、神から与えられたこの生を力の限り懸命に生きなければならぬ」とも先生は記しておられます。

たこの世の生を力の限り懸命に生きました。ご家族の皆さんはそれをよく見てきたことですし、奥様は文字通り共に懸命に生きてこられたと思います。先生は、今は「われわれの祖国」とご自身言われた天に移されています。「天上こそわれわれの祖国」は、歴史を生きる人生の慰めであり、また生きる勇気の源です。先ほどお読みいただいた聖書の箇所フィリピの信徒への手紙3章13、14節は「来世への憧憬」という先生ご自身の文章の結語に挙げられた聖書箇所です。この聖書の言葉を引用される直前にはこう記されています。「われわれはこの世において何ほどのこともなしえないが、われわれの未来には生命の冠が約束されている」。悲哀感がないわけではあります。しかし佐藤敏夫先生のこの言葉をもって、私たち地上に生きるものは、互いの慰めとすることができ、また生きる勇気を鼓舞されるのではないのでしょうか。「われわれはこの世において何ほどのこともなしえない

が、われわれの未来には生命の冠が約束されている」。お子様方がどうか佐藤先生の信仰に倣って希望を持って地上の歩みを進まれますように。そして奥様には、私たちは佐藤敏夫先生のお働きに深く感謝しており、先生から東京神学大学の神学を学ぶことができたことを誇りに思っていると申し上げたいと思います。そのことはまた、奥様が佐藤先生をいつも支えてくださっていたことに感謝していることでもあります。佐藤敏夫という優れた学問意識と歴史的、社会科学的感覚に長けた人をこの時代に与え、神学者、牧師として日本の教会のために用いてくださった神様の聖名を讃美いたします。

付記・「来世への憧憬」という先生の文書は、佐藤敏夫『忍耐について』(新教出版社)の中に収録されています

献金感謝報告 (2007年5月11日～2007年6月10日)

個人献金

酒井久美子	銀座教会	2,000
松永政和	泉ヶ丘教会	2,500
川崎善三	教師	5,000
北村知子	下田教会	2,000
吉田道江	教師	2,000
古木勝敏	銀座教会	5,000
吉本幸嗣・紀子	香里教会	5,000
狩野絢子☆	関西学院教会	5,000
鈴木優子	小松川教会	2,000
阿部泰弘	銀座教会	2,000
阿部博子	銀座教会	1,000
稲垣久子	銀座教会	2,000
伊藤正司・梅子	銀座教会	2,000
岩井玲子	銀座教会	1,000
岩澤 嵩	銀座教会	1,000
飯島幸子	銀座教会	2,000
今井恵子	銀座教会	1,000
伊東忠彦	銀座教会	3,000
五十嵐恵美子	銀座教会	1,000
鶴飼栄子	銀座教会	5,000
上田哲二	銀座教会	2,000
江沢和子	銀座教会	1,000
大西幸子	銀座教会	2,000
太田綾子	銀座教会	2,000
小原正夫	銀座教会	5,000
笠原个可・康子	銀座教会	2,000
河田有太郎	銀座教会	1,000
河上民雄	銀座教会	2,000

神谷和子	銀座教会	10,000
加藤郁代	銀座教会	1,000
河辺 勉	銀座教会	3,000
小高マリ子	銀座教会	2,000
小林美恵子	銀座教会	3,000
斉藤陽子	銀座教会	5,000
斉藤潤子	銀座教会	2,000
下山田香代子	銀座教会	3,000
白土辰子	銀座教会	2,000
菅原市子	銀座教会	3,000
関根和子	銀座教会	1,000
田代啓子	銀座教会	3,000
高畑アヤ子	銀座教会	2,000
田上美幸	銀座教会	2,000
武政千子	銀座教会	1,000
津村尚子	銀座教会	2,000
津村早苗	銀座教会	1,000
富岡良輔	銀座教会	1,000
長山順子	銀座教会	12,000
中島菊江	銀座教会	2,000
野崎武彦	銀座教会	2,000
林 恵子	銀座教会	3,000
菱沼将光	銀座教会	1,000
松垣京子	銀座教会	2,000
平山清太郎	銀座教会	2,000
平田康夫・美智子	銀座教会	2,000
富士松武子	銀座教会	2,000
保々和宏	銀座教会	2,000

北條静枝	銀座教会	1,000
牧野賢三	銀座教会	2,000
峰尾昌世・敬子	銀座教会	10,000
溝尻 寛	銀座教会	1,000
宮庄 博	銀座教会	3,000
室井真咲	銀座教会	1,000
餅田由紀子	銀座教会	2,000
山口ひさか	銀座教会	7,000
山野周市	銀座教会	1,000
山本和子	銀座教会	1,000
湯澤利平	銀座教会	2,000
吉村博光・潔子	銀座教会	1,000
吉田 彪	銀座教会	2,000
吉澤昇作	銀座教会	2,000
和田淳彦・洋子	銀座教会	2,000
市川テル	大阪教会	3,000
大見川昭子	大阪教会	3,000
吉本田鶴子	大阪教会	3,000
山本松太郎	大阪教会	3,000
福永嘉彦	大阪教会	1,000
合 計		196,500

教会献金

相模原教会(有志)	19,500
静岡教会	60,000
合 計	79,500

☆印は、イースター献金です。

聖書日課 8月

1 水

歴代誌下3章
マタイによる福音書

第28章11-20節

見よ、わたしは世の終わりまで、いつもあなたがたと共にいるのである。 20節

世の終わりまで主が私たちと共に生きて下さいます。復活が起こったということは、死の世界が最後の敵でなくなったということです。最後の肯定されています。羽仁もと子先生の言葉によれば「わが生命の果ては、死でなく、墓でなく、永遠の生命である。」

復活は死の死でありました。全く新しい創造を神は主イエスによって開いて下さいました。従って、復活の喜びを告げ、復活をもたらした神のみ名を告げることが教会の重大な使命です。伝道の業を神ご自身が助け、導いてくださることを宣言されたのです。導き手である主が私たちと共に一緒です。

4 土

歴代誌下6章

ローマの信徒への手紙

第1章16-17節

福音には、神の義が啓示されていますが、それは、初めから終わりまで信仰を通して実現されるのです。「正しい者は信仰によって生きる」と書いてあるとおりです。 17節

宗教改革者ルターが福音の発見をした聖句です。有名な「信仰義認」、ただ信仰によってのみ義とされる、という教えが福音として再発見されたのです。わたくしたちが義とされ、み救いにあずかるのは、律法を行う功績によってではなく、ただイエス・キリストを信じる信仰によるのです。

ハバクク書の言葉が引用されています。「しかし、神に從う人は信仰によって生きる」が原意だそうです。義とされる信仰、それは、第一にわたしの信仰ではなく、罪深いわたしたちに対する神の真実だ、と言うのです。有り難いことです。

2 木

歴代誌下4章

ローマの信徒への手紙

第1章1-7節

この福音は、神が既に聖書の中で預言者を通して約束されたもので、 2節

ロマ書は交わりを求めて書かれた手紙であると言われます。その書き出しには重要な用件のために初対面の人と会って挨拶を交わす時のような緊張感が感じられます。しかし、不安の影は見あたりません。交わりが開かれるのだという確信に包まれているように思われます。

交わりとはギリシャ語でコイノニア、大いなる一つのものに参与すること、福音に与ることです。福音のもとに真実の交わりは開かれます。御子イエス・キリストのもとに自分と隣人とを見いだすことができるのです。

5 日

コリントの信徒への手紙二

第12章7-10節

それゆえ、わたしは弱さ、侮辱、窮乏、迫害、そして行き詰まりの状態にあっても、キリストのために満足しています。なぜなら、わたしは弱いときにこそ強いからです。 10節

主イエスへの信仰は、その生活のすべての苦難を喜んで引き受けます。イエスの十字架の死がその奥義を示しているからです。あえて黙って殺されるその死の中にこそ真実の神の愛と強さが秘められていたのです。

私たちも愛する人のためならば、喜んでその苦難を引き受けるのです。それゆえキリスト者は、どんなに侮辱され迫害されても、危機に陥り行き詰まりに陥っても嘆かないのです。その一つ一つにキリストの御愛が共にあるからです。

3 金

歴代誌下5章

ローマの信徒への手紙

第1章8-15節

あなたがたにぜひ会いたいのは、霊の賜物をいくらでも分け与えて、力になりたいからです。 11節

パウロは地の果てと考えられていたスペインにまで赴いて伝道したいと願っていたようです。「あなたがたは行って、すべての国民を弟子とし」(マタイ28章19節)との主のお言葉の通りにです。

日本の教会はどうでしょうか。志し低く、力乏しいと言わざるを得ません。それが霊的な貧しさの故でなければ幸いです。ローマの教会は全世界にその信仰が知られていました。それでもなお、パウロは霊の賜物を幾分でも与えて力づけたいと願いました。さらにもっと力強く豊かに福音を宣べ伝えることができる。そう信じてきたのでしょう。

6 月

歴代誌下7章

ローマの信徒への手紙

第1章18-25節

不義によって真理の働きを妨げる人間のあらゆる不信心と不義に対して、神は点から怒りを現されます。 18節

「不義によって真理の働きを妨げる」を「不義において真理をもつ」と翻訳する聖書もあります。

人間は真理を不義をもつてもつことが何と多いことでしょうか。科学の真理であれ医学の真理であれ、それを不義な手をもつてもつのです。そして最悪なことには、神の恩寵の真理を不義の手で捉えてしまふのです。「罪の増し加わったところには、恵みもますます満ちあふれた」という福音の真理を、「恵みは増し加わるために、罪とどまる」という不義において捉える。そうだとすれば、まことにわたしたちは神の怒りのもとにあるのでありましょう。

聖書日課 8月

7 火

歴代誌下 8 章
ローマの信徒への手紙
第 1 章 26 - 32 節

彼らは神を認めようとしなかったため、神は彼らが無価値な思いに渡され、そのため、彼らはしてはならないことをするようになりました。 28 節

人間は氷の上のような滑りやすいところに立っているようなものだ、と言われます。人間は自由の上に立っているからです。

他者の手で投げ倒されるのではなく、ひとりてに倒れるのを免れない人間。つるつる滑るところに立っていたり、そこを歩いたりする人間は、自分の体重のみだけで転ぶに十分なのです。転ばないでおられるとしたら、神が支えていてくださるからです。しかし、その恩寵を忘れていたら、神さまはもはや支えず、放置されるのでありましょう。

10 金

歴代誌下 11 章
ローマの信徒への手紙
第 2 章 17 - 29 節

それならば、あなたは他人には教えながら、自分には教えないのですか。 21 節

教師が生徒に教えてそれを自分が実行していないとしたら、それは偽りの教師ということになりましょう。それだけではなく、教師職一般を汚すことにもなります。同じように、律法を重んじ誇りとしている人が、その律法を実行していないとすれば、偽り者であり、それだけではなく神の律法を汚しているのです。

ユダヤ人は自らを誇るために神から律法を与えられたではありません。人がそれを誇るのであれば、律法は汚されます。しかし、律法の前に謙遜に、それを為し得ない自らの弱さと罪を認めるなら、律法は私たちをキリストへと導いてくれるのです。

8 水

歴代誌下 9 章
ローマの信徒への手紙
第 2 章 1 - 5 節

あるいは、神の憐れみがあなたを悔い改めに導くことも知らないで、その豊かな慈愛と寛容と忍耐とを軽んじるのですか。 4 節

忍耐とは差し控えるという言葉です。特に敵意をあらわすことを差し控えるということです。罰を与えることを思いとどまる。寛容とは気が長いことです。容易に腹をたてないことです。

わたしたちは他人をいとも容易に裁いてしまいます。「あんなやつはダメだ」と。しかし、神はそうではありません。慈しみ深くいてくださいます。

人間は裁く力も権利もないのに他人を裁きますが、その力も権利も十分お持ちの神は、わたしたちが自ら悔い改めるようにと、忍耐深く寛容でいてくださいます。

11 土

歴代誌下 12 章
ローマの信徒への手紙
第 3 章 1 - 8 節

それはあらゆる面からいろいろ指摘できません。まず、彼らは神の言葉をゆだねられたのです。 2 節

この聖句は、ユダヤ人のすぐれている点や割礼の益は何か、の問いに対する答えです。ユダヤ人たちは、律法や割礼を持つている点がユダヤ人のすぐれている点と考えました。そして割礼を受け律法を行う自分たちを誇るようになりました。パウロは、律法とは言わずに神の言と語ります。第二も第三もなく何よりも神の言がゆだねられていること自体が素晴らしいことです。他者に対して誇るのではなく、感謝をもって神の言を受けとめたいものです。思えば、私たちもこの日本で、

教会につながって神の言を聴くことが出来る、それが既に恵みです。

9 木

歴代誌下 10 章
ローマの信徒への手紙
第 2 章 6 - 16 節

神は人を分け隔てなさいません。 11 節

「かたより見る」という字は新約聖書にだけしか使われていない、キリスト教の福音がこれをはじめて使ったのだそうです。「かたより見ることがない」とは、十字架の救いをおして知る神の真実です。

神は人の心を見とおしておられます。その目は厳しく、すべての人間が罪人であることを見とおしておられます。偏見、かたより見ることなしにです。それで、すべての者が救いを必要としていることを知っていただくさるのです。そして、人の心を見とおしておられる方は、どのような事情の人にも、同じように、最大の救いをお与えになるのです。十字架の救いによってです。

12 日

ヨハネによる福音書
第 14 章 25 - 31 節

しかし、弁護者、すなわち、父がわたしの名によってお遣わしになる聖霊が、あなたがたにすべてのことを教え、わたしが話したことをことごとく思い起こさせてくださる。 26 節

主イエスは十字架の死が近づき、弟子たちに別れを告げる言葉の中で、助け主たる聖霊の派遣を約束されています。しかも聖霊の働きについて「教え」「思い起こさせる」ことであると語られています。

教会は聖霊の働きによって、イエスの御言葉と出来事を鮮明に記憶し続ける共同体なのです。聖霊の働きによってこそ、私たちは悔い改めの心を取り戻し、主の平安を得ることが出来ます。

聖書日課 8月

13月

歴代誌下13章
ローマの信徒への手紙
第3章9-20節

わたしたちには優れた点があるのでしようか。全くありません。 9節

「わたしたちの不義が神の義を明らかにするとしてら、」(5節)、神の義を明らかにするために私たちが何か悪いことをしていた方が良いのでしょうか。それは、へ理屈です。いくら神様が罪を赦して下さると言っても、それでその赦しを明らかにするために悪いことをして良いわけではありません。それなら、逆に律法を行えばいいのでしょうか。それが私たちのまさった所になるでしょうか。全部行うことは出来ません。律法は罪の自覚を生じさせるのみです。また出来た所でそれでキリストを不要にしてしまおうとしたら、それも実に罪深いことです。

16木

歴代誌下16章
ローマの信徒への手紙
第3章27-31節

むしろ、律法を確立するのです。 31節

律法の行いによってではなくキリストの贖いの業を通して恵みによって救われるのなら、律法は無効になり不要になるのでしょうか。パウロは「かえって、それによって律法を確立する」のだと語ります。律法は救いを得るためのものではありません。律法が目指すのは、恵みによって救われ信仰によって神からの愛を自覚した者が、まず感謝をささげて神を愛する(礼拝をささげる)ことです。そして神のを分かち合うように隣人を愛する(奉仕に生きる)ことです。神からの愛を受け救われてこそ、律法は神と隣人への愛において確立されていきます。

14火

歴代誌下14章
ローマの信徒への手紙
第3章21-24節

ただキリスト・イエスによる贖いの業を通して、神の恵みにより無償で義とされるのです。 24節

誰であれ神の前に義とされ救われます。それは、律法を行ったという価値が私たちにあらからではありません。それは全く恵みによります。その恵みは、キリスト・イエスにある贖いを通して、全ての人々に差し出され、私たちにも与えられます。私たちが神からの義を受け取り救われるのは、十字架のキリストのおかげであると信じるからです。この点は何らの差別もありません。ユダヤ人でもギリシヤ人でも日本人でも誰でも、信じる時、受けることが出来ます。

17金

歴代誌下17章
ローマの信徒への手紙
第4章1-8節

しかし、不信心な者を義とされる方を信じる人は、働きがなくても、その信仰が義と認められます。 5節

働きはなくても、不信心な者を義となさる神がおられます。私たちはこの方を神と信じます。決して律法を行う働きの度合いによって人を義となさるような者を神として信じるではありません。

「アブラハムは神を信じた。それによって、彼は義と認められた」。彼は律法を行うことによって義となったのではありませんでした。アブラハムはただ、不信心な者を義とする方を信じたのです。私たちにとってその方はキリストです。主を信じることによって、義でない私たちも義と認められます。

15水

歴代誌下15章
ローマの信徒への手紙
第3章25-26節

今この時に義を示されたのは、御自分が正しい方であることを明らかにし、イエスを信じる者を義となさるためです。 26節

「今や、神の義が、現された」(21節)。キリストの到来と十字架と復活の出来事によって一度限り、神の義は完全に現され啓示されました。その時以来、神の義がずっと示され啓示され続けています。「今までに犯された罪を、神は忍耐をもって見のがしておられたが」とあります。それはまず旧約時代の罪のことですが、更にその後も誰もが犯し続け、かつ今日私たちが犯し続ける罪でもあります。そのような私たちがしかし、今の時は神の義が示されている時なのだ、自分や他人が犯す罪に振り回されないうで、しっかりとキリストを仰ぐのです。

18土

歴代誌下18章
ローマの信徒への手紙
第4章9-12節

割礼を受けてからではなく、割礼を受ける前のことです。 10節

アブラハムの信仰が義と認められたのは、律法に従って彼が割礼を受けた後ではなく、それ以前の段階からでした。義と認められるためには割礼は不要です。割礼は信仰によって受けた義の証印です。

では何のための割礼だったかという点、割礼を受ける後の世代のユダヤ人の父となるためでした。しかも、アブラハムは彼が無割礼の時に信じて義と認められたのですから、後の時代に無割礼のまま信じて義と認められる人々の父ともなっています。私たちにとって信仰の父がいるということは、彼の信仰の足跡の通りに信じれば良いということです。

聖書日課 8月

19日

ローマの信徒への手紙 第8章1-17節

あなたがたは、人を奴隷として再び恐れに陥れる霊ではなく、神の子とする霊を受けたのです。この霊によってわたしたちは、「アツバ、父よ」と呼ぶのです。

私たちが神様から頂いている恵みは数え切れないほどあります。その中で聖霊の賜物は最大の賜物の一つでしょう。「また、聖霊によらなければ、だれも『イエスは主である』と言うことができない」とパウロがコリントの信徒への手紙二、一〇章で言っているとおり、私たちが正しい信仰に導く力は聖霊によるといえましょう。聖霊の導きをないがしろにする信仰者の生き方には、何か独りよがりがあります。神様の、恵みの賜物である、聖霊の働きを信頼する正しい信仰を大切にしましょう。

22水

歴代誌下21章
ローマの信徒への手紙 第5章1-2節

このように、わたしたちは、信仰によって義とされたのだから、わたしたちの主イエス・キリストによって神との間に平和を得ており、

「信仰によって」、わたしたちは義とされたのであり、いま立っている恵みに導き入れられたのです。ですから、わたしたちはわたしたちの主イエス・キリストにより、神との間に平和を得ることができます。その平和は、神から与えられるまことの平和、平安です。さらに、わたしたちは神の栄光にあずかる希望を持つことができ、そのために喜ぶことができるのです。

20月

歴代誌下19章
ローマの信徒への手紙 第4章13-17節

死者に命を与え、存在していないものと呼び出して存在させる神を、アブラハムは信じ、その御前でわたしたちの父となったのです。

アブラハムには神からの大きな約束がありました。「わたしは、あなたを立てて多くの国民の父とした。妻と共に年老いた彼にとつて、この約束は人間的に考えれば実現不可能な約束、いわば無約束でした。でもアブラハムは、まだ見ていない事実を確認するようにして、神の約束の実現を信じました。なぜなら「この神、すなわち、死人を生かし、無から有を呼び出される神を信じた」からです。その時彼は、イサクの父になるだけでなく、アブラハムのこの信仰に従う全ての子孫の父ともなったのです。

23木

歴代誌22章
ローマの信徒への手紙 第5章3-5節

希望はわたしたちを欺くことはありません。わたしたちに与えられた聖霊によって、神の愛がわたしたちの心に注がれているからです。

御言葉は、患難は忍耐を、忍耐は練達を、練達は希望を生み出すと語ります。患難の時、わたしたちはこの御言葉から希望を教えられます。この希望は、「失望に終わることはない」のです。なぜなら、キリストの十字架によってわたしたちを救ってくださる神の愛が、聖霊によって直接わたしたちに与えられているからです。ですから、患難をも喜ぶことができるのです。

21火

歴代誌下20章
ローマの信徒への手紙 第4章18-25節

イエスは、わたしたちの罪のために死に渡され、わたしたちが義とされるために復活させられたのです。

人間には実現不可能の約束でも「神はその約束されたことを、また成就することができる」とアブラハムは確信します。それで彼は義と認められました。その約束を自分の力や能力で実現させたのではないという意味で、彼は罪人のまま義と認められました。しかし神が成就して下さるのなら、彼は本当に義とされます。神は私たちが義となさいます。その成就のために、キリストが私たちの罪過を代わりに背負うために十字架にかかって下さいました。そして主が甦らされて、私たちが義とされました。

24金

歴代誌下23章
ローマの信徒への手紙 第5章6-8節

しかし、わたしたちがまだ罪人であったとき、キリストがわたしたちのために死んでくださったことにより、神はわたしたちに対する愛を示されました。

神の御子であるキリストは、神を信じない不信心なわたしたちのために死んで下さいました。不信心な罪人を罪の中に放っておくことなく、罪の中から救い出すためでした。神はそれほどまでにわたしたちを愛してくださいます。神は人に与えてくださった御自身の愛を、大切な御子の死という仕方でも、示して下さいます。同時に、わたしたちは、与えられている神の愛の大きさを知るのです。

聖書日課 8月

25 土

歴代誌下24章
ローマの信徒への手紙
第5章9-11節

それだけでなく、わたしたちの主イエス・キリストによって、わたしたちは神を誇りとしています。今やこのキリストを通して和解させていただいたからです。 11節

神は、敵であり、罪の中にある人に対して、御子であるキリストが血を流すという仕方によって、御自分から和解の御手を差し出してくださいました。わたしたちをもはや敵とせず、義とし、救うためです。敵であったにもかかわらずわたしたちを愛し、貴い御子のいのちによって救ってくださった神を、わたしたちはパウロと共に喜び、誇りにすることができます。

28 火

歴代誌下26章
ローマの信徒への手紙
第5章15-17節

一人の罪によって、その一人を通して死が支配するようになったとすれば、なおさら、神の恵みと義の賜物とを豊かに受けている人は、一人のイエス・キリストを通して生き、支配するようになるのです。 17節

神の恵みと、ひとりの人イエス・キリストの恵みによる賜物は、ひとりの人アダムによって罪と死が世に入ってきた以上の力を持って、豊かに多くの人々に満ちあふれます。ですから、もはや死がこの世を支配することなく、あふれるばかりの神の恵みと義の賜物とを受けている者たちが、イエス・キリストとおして支配するのです。

26 日

ローマの信徒への手紙
第11章11-24節

彼らの罪が世の富となり、彼らの失敗が異邦人の富となるのであれば、まして彼らがみな救いにあずかるとすれば、どんなにか素晴らしいことでしょう。 12節

イスラエルの民のことが、神に養われていたのに、不信仰ゆえに切り去られた枝として語られます。そのようなことが、教会にもあります。神の恵みから切り去られたようになって、神と教会から遠のいてしまった人たちです。とても残念であり、つらいことです。それらの人には、もはや滅びしか残されていないのででしょうか。神には再生させる力があります。ですから、離れている人達が、再び神の恵みの養いを受けて歩み出せるように祈ることも、大切にしたいものです。

29 水

歴代誌下27章
ローマの信徒への手紙
第5章18-21節

そこで、一人の罪によってすべての人に有罪の判決が下されたように、一人の正しい行為によって、すべての人が義とされて命を得ることになったのです。 18節

主イエス・キリストの義なる行為と従順によって、いのちを得させる義がすべての人に及ぶのです。人の力によるものではありません。律法によって罪が罪と認められるようになったのも、罪が支配する以上の恵みが豊かにあふれるためでした。罪に対して恵みが、死に対して義が、主イエス・キリストによって与えられています。わたしたちに永遠のいのちを得させるためです。

27 月

歴代誌下25章
ローマの信徒への手紙
第5章12-14節

このようなわけで、一人の人によって罪が世に入り、罪によって死が入り込んだように、死はすべての人に及んだのです。すべての人が罪を犯したからです。 12節

一人の人、アダムが神に背く罪を犯したことによって、すべての人に罪が入り、死が入り込みました。律法を知らなければ罪と認められないとしても、その罪は罪として存在し、「アダムの違反と同じような罪を犯さなかった者」をも支配しました。しかし、主イエス・キリストによる救いは、アダムによって罪が世に入った「型」(14節)のように、全人類に入り込むものなのです。

30 木

歴代誌下28章
ローマの信徒への手紙
第6章1-14節

それは、キリストが御父の栄光によって死者の中から復活させられたように、わたしたちも新しい命に生きるためなのです。 4節

神の側から人にかかわってくださる十字架の主イエス・キリストに結ばれることが、恵みに生きる道です。それは、復活のいのちにあずかるバプテスマを受けるということことです。バプテスマによってキリストに結ばれるならば、わたしたちはキリストの死にあずかって罪に死に、キリストと共に復活のいのちに生きることができるとです。

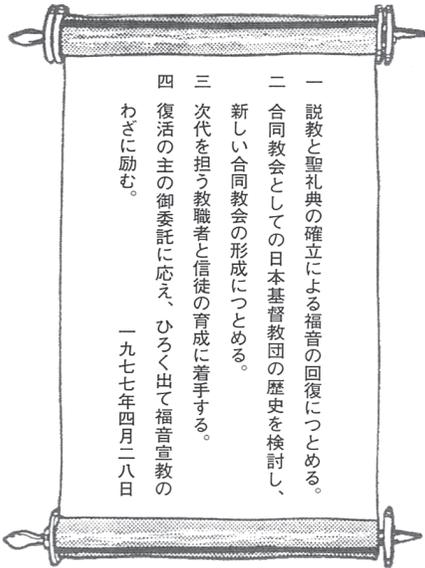
聖書日課 8月

31 金

歴代誌下29章
ローマの信徒への手紙
第6章15-23節

罪が支払う報酬は死です。しかし、神の賜物は、わたしたちの主キリスト・イエスによる永遠の命なのです。

「しかし今や」(22節)とパウロは叫びます。これは喜びの叫びです。確かに私共は自分の罪を知っています。私共は神様を知らず、自分の思うことやすることには神様の御心から遠く離れておりました。私共の生涯の中には消しゴムで消せるものならば消してしまいたいことが幾つもあります。この罪の報酬は死のほずです。ところが今や主イエスによって私共は永遠の命を賜ったのです。罪人である私共が永遠の命を賜ったのです。ただキリストの恵みの故です。この恵みへの歓喜の中で私共は歩むのです。



一 説教と聖礼典の確立による福音の回復につとめる。
二 合同教会としての日本基督教団の歴史を検討し、新しい合同教会の形成につとめる。
三 次代を担う教職者と信徒の育成に着手する。
四 復活の主の御委託に応え、ひろく出て福音宣教のわざに励む。
一九七七年四月二八日

福音主義教会連合の主張 (創立感謝宣言より)

教会教育には「教会学校教案」をどうぞ

七月号 目次

巻頭言……………中野 実

「御言葉の種まき」

特集……………林 牧人

「この聖書の言葉は、今日、実現した」

七月号の教案

テキスト研究……………大住 雄一

説教例

尾崎マリ子・七條 真明・福井 博文

徳安 早人・吉岡 康子・長谷川洋介

堀岡満喜子・伊藤 悟・小泉 健

小林 信人・中谷 清・辻川 篤

聖句カードのお話……………浅見 覚

分級教案……………寛 伸子・田中かおる

読者の広場・教会紹介 玉川平安教会(東京都)

編集室

◆ 今号から隔月の予定で小林貞夫氏による「教団紛争史」を連載いたします。筆者の緻密なメモをもとに綴られます。ご期待ください。

◆ お詫びし訂正いたします。

6月号1頁

(誤) 北川義也↓(正) 北川善也

本紙 7月号 目次

説教……………春原 禎光 1

「あなたは世に欠かせない」

《シリーズ》山北宣久議長総括から考える 具志堅 篤 2

実録 教団紛争史(二)

第一章 教団紛争の輪郭 小林 貞夫 3

佐藤敏夫先生を天に送って 近藤 勝彦 5

《連載》

伝道する教会と礼拝堂(第2回) 山口 隆康 7

証し「伝道師として赴任するにあたって」 堀江 知己 8

《シリーズ》信徒のための旧約用語基礎知識14 「平和」 小友 聡 9

献金感謝報告(6月分)……………10

聖書日課(2007年8月)……………11

教案誌案内・編集室……………16

昭和52年10月13日第三種郵便物認可(毎月1回10日発行)

発行所 日本基督教団 福音主義教会連合

〒104-0061 東京都中央区銀座4-2-1 銀座教会堂ビル内

電話03-3561-0231 FAX03-3561-0242

郵便振替口座 00170-7-33909

発行人 長山信夫

編集人 張田 眞

編集室 日本基督教団 鳥居坂教会内

〒106-0032 東京都港区六本木5-6-15

電話03-3401-8704 FAX03-3401-8289

定価1部250円(〒60円) 年間購読料3000円(送料とも)

20部以上200円